～和の風～ 町長随想

増澤 善和

天皇家と南越前町（三）

継体天皇（男大迹王）の業績

継体伝説としての業績は、治水・灌漑・笏谷石・漆器・和紙・製鉄・養蚕・製塩などが上げられる。しかし、これらがいかに偉人であったとしても一人の力で成し遂げたとは考えられない。越前には右記の産業を開発できる技術力・財力・家柄をもつ勢力団体が、かなり長期間続いたと考えるべきであろう。

まず第一に、男大迹王の母親、振媛の実家の三尾家や彼の七人（九人説もある）の王妃は、越前内外の大豪族の出身であり、当時の天皇家と肩を並べるほどの大勢力を持っていたのである。この継体勢力を支えた伝説の中でも大きな意義を持つものは、製鉄・養蚕・製塩の三つであり、これらは南越前町とも関係が深いので取り上げてみたい。

製鉄　男大迹王のホドは火土（鍛冶炉）であるといわれているが、継体勢力の最大の基盤は製鉄であろう。この時代まで鉄の輸入源だった朝鮮半島は、内乱が長引きヤマト（日本）は鉄不足だった。この頃越前に渡来した新羅人達をシラ神軍団と呼ぶが、これが今庄や敦賀の白城神社や信露貴彦神社信仰となる。この渡来人達の技術力が製鉄だけでなく治水や各種産業の創設に大きな影響を与えたと考えられる。

①金津（鉄を出す港）の製鉄

男大迹王が育った高向の北にある金津の細呂木周辺で、北陸最古の古代製鉄遺跡である「たたら遺跡」群が発見された。「たたら」は砂鉄を溶解させるための炭火の温度を上げるのに使う足踏み吹子のことであり、遺跡からこの吹子も発見された。遺跡にあった木炭の放射性炭素の測定から、継体時代（古墳時代）のものであることがわかった。この時代、排水・灌漑の治水工事の技術には、鉄製の、少なくとも一部分は鉄で補強された土木工具が必要だったであろう。この金津の鉄が芦原や沼地の多い越前平野を水田化させ、鉄製農具も使われて米収穫が急増したと考えられる。また、この鉄は松岡（芝原）・志比堺・三国の鋳物師の鋳物原料ともなった。

②日野山周辺の鉱山・鋳物師

まず、男大迹王が本当に日野山周辺に住んでおられたのだろうか。一説には世阿弥の作った謡曲「花筐」の中で、男大迹王と照日ノ前の恋物語の場所が味真野であることが有名になり、地元の人達があらゆる産業や業績を継体天皇に結び付けただけであると。しかし、継体天皇などを祭神とする神社やその伝説があまりにもこの地域に多いこと、また継体勢力を支えた鉄産業も多いことから、この地に少なくとも一時期在住されたと推理したい。さらに、多くの王妃の故郷は近江北部・河内・淀川中流帯のいずれも古い製鉄地であり、渡来技術者をこの地に送る中継基地として日野山周辺を利用されたとも考えられる。とすると、交通の便がよく、近くに大きな河川もなく、扇状地で排水も良いというまことに住みやすい味真野の鞍谷御所を別荘として住まわれたという説を支持したい。

さて、この鞍谷御所近くに五分市・金屋集落があるが、ここが五分市鋳物師が古くから活躍した場所である。この近くに金山彦神社があるが、この祭神は金山彦神と金山姫神で「たたら遺跡」近くの金津神社の祭神と同じである。このことは、男大迹王が金津の鉄技術者とともに、鉱山・鍛冶の神を分身してこの地に移したとも思われるのである。日野山西北部にある武生の打刃物の歴史も古いが、鉄原料は村国山北部の風化花崗岩砂（ブラックサンド）からとる砂鉄であり、これは金津の砂鉄原料と同じである。

最後に、南越前町の鉄について記してみたい。まず、継体伝説のある麻気神社近くの牧谷鉱山であるが、中世には銀山として栄え、慶長三年の記録に銀三百六十枚で京都の又右衛門が請け負うほどの生産量であった。昭和三十三年の大阪通産業局の調査結果によると、磁硫鉄鉱・黄鉄鉱・閃亜鉛鉱が主であり、鉄が40％以上含むと報告されており、古代には鉄も産出されたといわれている。鉱山の地下には数百メートルの坑道がクモの巣状に通じ、大正時代には百人近くの坑夫がいたが昭和二十年に閉山した。

牧谷の隣が鋳物師であるが、現集落の東北に金山と呼ぶ鉱山跡があり、昔はここに鋳物師達が移り住んで鋳物を作ったと言われている。しかし中世になって朝倉義景が敦賀に築城する為に、この鋳物師達は徴用されて敦賀に移動し敦賀鋳物師村を造った。従って江戸時代以降は、鋳物師という名前だけ残ったようだ。

最後に平吹とその枝村の嶋の鋳物師について述べたい。

まず平吹（嶋を含めて）の氏神は勿論日野神社である。祭神は日野大神・継体天皇・安閑天皇・宣化天皇である。日野大神は、日野山そのものが信仰の対象とする神であり、天照大神・大己貴命（製鉄の神）・火産霊神（火の神）・和爾子命（製鉄の神）の神々の総称。日野山は昔御岳山と呼んだがこれは火焚が変化したもの。いずれにしても古代製鉄人は日（火）の神を信仰の対象としていた。平吹の名は「たたら」と同じ吹子と関係があるようだ。鋳物作業場を吹屋、鋳物師職を吹職と古文書に表現している。しかし鉄関係の遺跡や古文書などはほとんどない。これに対し嶋は三集落の中で一番鋳物師記録が残る所である。江戸初期からの記録で鋳物師免許の古文書、松岡の芝原鋳物師や志比堺鋳物師との交流記録もある。近辺寺院の梵鐘やナベやカマなどが大量生産された。しかし明治元年六月に鋳物工場から出火し、嶋の殆どが全焼したので、鋳物師達は近くの一本杉（国兼）に移動した。（次号へ）